

書評

岩田 誠, 河村 満 編

《脳とソーシャル》

ノンバーバルコミュニケーションと脳

自己と他者をつなぐもの

祖父江元

第一線の研究者による総決算

インターネット時代に入ってわれわれは大きく世界が広がったように感じている。E-mail により、外国の相手とも瞬時にコミュニケーションが可能となっており、われわれはこの e-mail なしには一日も過ごせなくなっているといっても過言ではない。しかしこの e-mail は相手の顔が見えないし、声が聞こえない。われわれは文字情報に頼って真意を汲み取ろうとする。一方電話は、相手の声が伝わる。大切な相談や伝達は電話を使うことが多い。相手の声の中に本音を読み取れると感ずるからではないか。相手の気持ちを確かめながら、情報の交換ができると感じている。しかし、さらに相手の本音や心に触れるコミュニケーションをとりたい時には実際に会って話をするということを行っている。相手の表情、目の動き、手振り、声の抑揚、姿勢などその情報は格段に増すことになる。われわれは言葉以外の部分にその人の本音の部分、本当の部分を読み取れることを本能的に知っているように思われる。最近では、このノンバーバルなコミュニケーションが大変希薄になっているように感じられる。しかしこのノンバーバルの部分が、ヒトの成長・発達や社会とのかかわりの中で、より重要で本質的ではないかとわれわれは薄々感じている。インターネット時代の中でのこの部分の希薄さが、最近の社会性の欠如した人間の出現や犯罪にもひょっとして関連しているのかもしれないと感じたりしている。

このような時代の中で、本書はノンバーバルコミュニケーションの重要性について説いている。それはどのようなもので、どのような脳のメカニズムによって行われるのか、どのような研究が進行してい

るのか、ノンバーバルコミュニケーションの領域の第一線の研究者による総決算が提示されている。本書を読み進むに従って、それがいかに重要なものなのか改めて認識させられる。人格や社会性とその破綻や、さらには脳科学の社会的意義という脳科学の中心課題にも踏み込んでいる。なかでも顔認知の脳科学と身体コミュニケーションの脳科学に大きなスペースが割かれており、ノンバーバルコミュニケーションの重要性とその脳メカニズムが異分野の人にもわかりやすく解説されている。

さらに本書の魅力は、岩田誠、河村満の両編者が、発刊に寄せて、あるいはあとがきにかえてとして対話の形式をとりながら、ノンバーバルコミュニケーションの本質を語り合っている点である。これは随想風の「こぼれ話」と相まって、ノンバーバルコミュニケーションについての本音の部分が盛り込まれているように感じられる。各章のエキスパートによる文字情報に対して、本音の議論がアクセントを作っているという構成は見事である。

本書はノンバーバルコミュニケーションの重要性を脳科学の立場から解説した啓発の書である。脳科学によって人の心や文化といったさらに高度の脳活動を読み解くことが可能であることを示唆するチャレンジの企画であると思う。

本書はわれわれ神経内科医など、脳科学の領域に携わる者にも心地よい内容であるが、広く一般の人々や異分野の人々にこそ推薦したい。

(名古屋大学大学院神経内科学)

●A5 240 頁 2010 定価 3,780 円(本体 3,600 円+税) 医学書院